

穂いもち感染時期と収量の関係

福島県農業総合センター 生産環境部
平成19年度農業総合センター試験成績概要

1 部門名

水稻 - 水稻 - 病虫害防除
分類コード 01-01-22000000

2 担当者

山田真孝・皆川博孝

3 要旨

穂いもち感染時期が、出穂始めからの日平均気温の積算温度で100 以内の場合、収量は大きく減少するが、積算温度が350 を超えると収量に及ぼす影響は小さくなる。

- (1) 外気追従型温度勾配施設で、出穂後の温度条件と接種時期を変えて試験を行ない、穂ごとの解析を行なった。
- (2) 積算100 以内(出穂始めから4～5日以内)で穂いもちに感染した場合、冷温条件(平均気温約20)、高温条件(平均気温約24)ともに収量が大きく減少した。
- (3) それ以降は、感染時期が遅いほど、収量に及ぼす影響は次第に小さくなるが、高温条件に比べ、冷温条件の方が長期間穂いもちに対する感受性が高く保たれる傾向があった。
- (4) 出穂から積算温度350 (平均気温25 で14日、20 で18日)を超えると収量に及ぼす影響は小さくなった。

4 その他の資料等

なし